＜昭和58年度臨床相談技術共同開発事業＞

民間相談機関における臨床技術について

― 就園前障害児の指導技術を通して ―

その８　親の変化と子どもの変化との関連検討を中心として

家庭生活研究会　水島恵一（文教大学）
宮崎徳子
村瀬和子
佐々木正宏（国学院大学）

1　序

本研究は，児童相談，治療教育に関する総合人間学的実践研究として，相談機関，施設を児童・家庭の「生活の投影の場」としてとらえ，そこでの処遇を通じ，現実的レベルと象徴的レベルにおいて，生活の再編成がなされていく過程を明確化しようとする総合研究その１～その５（村瀬他，1978.，宮崎他，1979.，植村他，1980.，水島・宮崎他，1981）の一部である。

2　目的

相談室においては，障害児本人への対応とその親への対応がなされる。相談室で把握される子どもの行動や親の認知・ニードは，「生活の投影」即ち，実生活の子どもと親に関する変数が相談室内の諸事象に投影されたものと考えられるが，それらは，相談室のスタッフによる子どもや親への働きかけを通じ，実生活場面における子どもの行動，親の認知・ニードにフィードバックされると考えることができる。実生活と相談室との相互作用が問われなければならないのである。また，親が子どもに与える影響，子どもが親に与える影響をないがしろにすることはできない。両者の相互作用があるという前提がなければ，たとえば，相談室における親に対する働きかけは意味のないものになってしまう。

ここでは，先行する諸研究のあとをうけて，上記の相互作用のあらわれを検討することを目的として，生活場面における子どもの行動の変化と相談室における子どものプレイ行動の変化の対応をとり上げ，さらに，子どもの行動の変化と，親の側のニード等の変化の対応を分析していくことにする。なお，予備的な分析として，子どもの行動，親のニード等をとらえるための諸テストの基礎的吟味も，水島・宮崎他（1981）に引き続き行うことにする。すなわち本論は，統計的数量的処理としての総括的位置づけをもつ。

3　方法

被験者：家庭生活センター相談室および文教大学付属相談室において，半年以上の間グループ指導を行なった障害児（知恵おくれ，自閉症等）とその母親，69組である。

テスト：分析に用いたテストは，家庭生活センター相談室および文教大学付属相談室で，比較的継続的に使用されているものである。表１に，それらを分析の単位指標とした下位テストのカテゴリーと併せて示す。C_2，C_4，P_7の図式投影法については，文教大学人間科学研究会（1981），東京臨床心理研究会（1981）等の報告にその詳細が記されている。

テストの評定者は，表１に示されている通り，子どもに関するもの（Cn）についてスタッフおよび親，親に関するもの（Pn）については親自身である。テストの評定は，一定期間をおいて前期と後期の２回行なわれたが，多くのケースについて臨床的働きかけが続けられており，その後のテストが実施されたものもある。ここでは，前期，後期の２回のテストの結果の分析のみ行なうことにする。

4　結果と考察

4－1　下位テスト間相関

表1　テスト一覧

略号	テスト名	下位テストカテゴリー	評定者
C_1	子どものプレイ行動評定尺度	母子分離と緊張の度合 遊び（の活発さ） ＴＨとの関わり 他のメンバーとの関わり 言　語	スタッフ
C_2	子どものプレイ行動図式投影	対プレイ態度 対ＴＨ態度	スタッフ
C_3	子どもの生活場面行動質問紙	一般的関心 大人との関係 言うことをきく	親
C_4	子どもの生活場面図式投影	対生活場面態度 対母親態度	親
P_3	親のニード質問紙	子どもへの感じ方の悩み 子どもへのネガティブな感情 子ども自身の状態についての悩み 幼稚園・保育所・学校に関する悩みとニード 子どもへのポジティブな感情・態度	親
P_7	親子関係カード式投影	今の子どもに対する気持 日頃の子どもに対する気持 子どもの母親に対する気持	親

(A)まず，C_1 から C_4 について，それぞれの下位テストがどの程度の等質性を有するかを明らかにする基礎資料を得るために，前期のテスト結果を用い，下位テスト間の相関係数を算出した（図１）。──で結んである対は有意な相関があったものである。有意な相関がなかったものは── および相関係数を省略してある。

C_1 の下位テスト間では，「母子分離と緊張の度合」と「他メンバーとの関わり」の間で有意な相関がなかったのみであり，あとは全ての下位テスト間で有意な相関が得られている。相関は 0.2 台の比較的低い値から，0.7 台というかなり高い値に渡っている。「言語」，「遊び（の活発さ）」，「他メンバーとの関わり」の３者間の相関が最も高いところから，この３下位テストが C_1 の中心的性質をあらわしていると言える。C_2 においては，「対プレイ態度」と「対ＴＨ態度」の間で中程度の相関があった。C_3 の３つの下位テスト間では，0.6 台から 0.8 台というかなり高い相関が得られている。これら３者は等質性が高いと言うことができよう。C_4 においては，「対生活場面態度」と「対母親態度」の間で中程度の相関があった。以上，全体的に見て，かなり高い相関を示すものはあったが，極端な等質性を示すもの ── 従って独立性が認められないものはないため，下位テストを単位指標として分析することが妥当であると認められたと考えられる。

(B)親のニード等に関する基礎資料として，P_3 と P_7 の前期テスト結果を用い，下位テスト間の相関係数を算出した（図２）。ここでも，子どもに関するテストの場合と同様，── で結んである対は有意な相関があったものであり，相関が有意な水準に達しなかったものは── および相関係数を省略してある。

P_3 の下位テスト間では，「子どもへのポジティブな感情・態度」を除いた４者間において，0.3 台の低目の相関から，0.6 台という中程度の相関が認められた。「子どもへのポジティブな感情・態度」と「子どもへのネガティブな感情」との間には，負の相関が見られた。これは，両下位テストの性質を考えるならば予測通りの結果と言えよう。「子どもへのポジティブな感情・態度」は P_3 の下位テスト内では比較的独立した，また特異な位置を与えられている下位テストであると言えよう。P_7 の下位テスト間では，「今の子どもに対する気持」と「日頃の子どもに対する気持」との間でのみ有意な相関があった。「子どもの母親に対する気持」は他の下位テスト

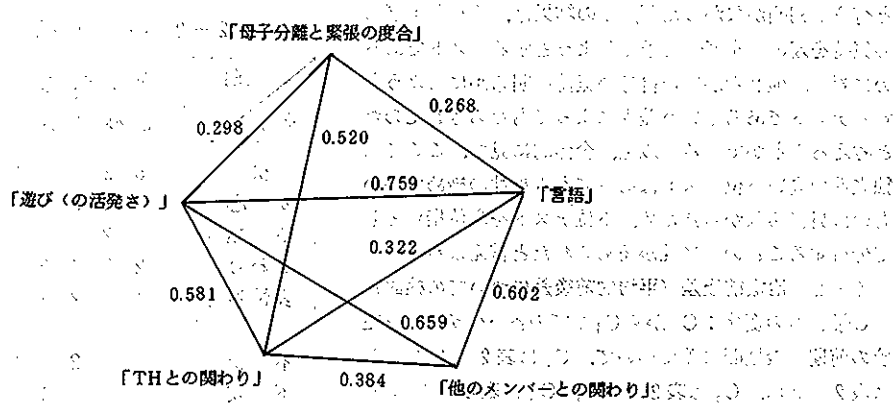


図１－１　C_1 の下位テスト間相関

「対プレイ態度」 —0.491— 「対TH態度」

図１－２　C_2 の下位テスト間相関

「対生活場面態度」 —0.447— 「対母親態度」

図１－４　C_4 の下位テスト間相関

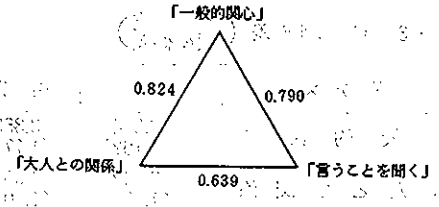


図１－３　C_3 の下位テスト間相関

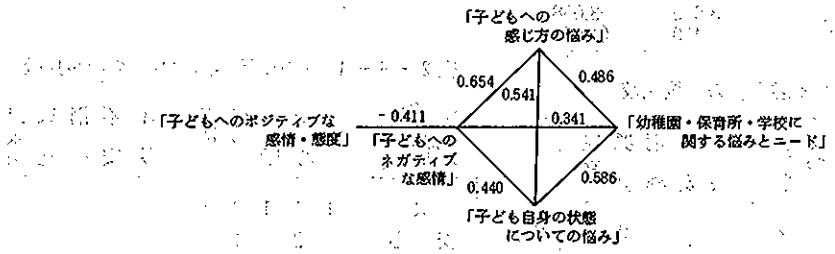


図２－１　P_3 の下位テスト間相関

「今の子どもに対する気持」 —0.505— 「日頃の子どもに対する気持」

「子どもの母親に対する気持」

図２－２　P_7 の下位テスト間相関

と有意な相関がなかったが，この結果は，それが子どもの気持を親の目を通して予測しようとするテストであるのに対し，他2者が母親自身の気持を明らかにしようとするテストであるという差異によってもたらされたのだと考えることができる。以上，全体的に見て，ここでも独立性の高い下位テストはあっても等質性の極めて高いものは見当らなかったため，下位テストを単位指標として分析することの妥当性が認められたと言えよう。

4－2　治療前後差（平均的前後差についての検討）

(C)子どもの変化：C_1 から C_4 までの各下位テスト評定値の前期—後期間の差について，C_1 は表2－1に，C_2 は表2－2に，C_3 は表2－3に，C_4 は表2－4に示す。C_1 と C_3 は評定値（1～5の値，大きい値程好ましい状態，たとえば「より母子分離ができている」，「より遊びが活発である」ことをあらわしている）に基づく平均と標準偏差である。C_2 と C_4 は，選択されたカテゴリーのパターンである。

表2－1　C_1 の前後差（平均 / 標準偏差）

下位テスト	前期	後期
「母子分離と緊張の度合」	3.232 (1.341)	3.297 (1.479)
「遊びの活発さ」	3.019 (1.005)	2.986 (0.981)
「THとの関わり」	3.058 (1.056)	2.869 (1.156)
「他のメンバーとの関わり」	2.928 (1.391)	2.860 (1.270)
「言語」	3.000 (1.460)	3.058 (1:051)

表2－2－1　「対プレイ態度」の前後比較

前期＼後期	快	安心	積極	交わり	表情豊	不快	不安	消極	狐立	無表情	
快	8	2	3	1	2		1		2		19
安心	2		1			1				1	5
積極	2	1	10		2		1	3	1		20
交わり	2				2						4
表情豊	4		1		1						6
不快											
不安	1				1						2
消極											
狐立	5			1			1		2	1	10
無表情	2										2
	26	3	15	2	8	1	3	3	5	2	68

表2－2－2　「対TH態度」の前後比較

前期＼後期	快	安心	積極	交わり	表情豊	不快	不安	消極	狐立	無表情	
快	2	5	2		1						10
安心		9	3	5				1			18
積極			2	1							3
交わり		2	3	4	2						11
表情豊		1	1	2	1					1	6
不快				2							2
不安					1						1
消極	1	2		2							5
狐立				2							2
無表情	1	2		1	1	1		2		1	9
	4	21	11	19	6	1		3		2	67

表2－3　C_3 の前後差（平均 / 標準偏差）

下位テスト	前期	後期
「一般的関心」	3.324 (1.162)	3.353 (1.171)
「大人との関係」	3.942 (1.278)	4.051 (1.201)
「言うことをきく」	3.264 (1.182)	3.377 (1.162)

表2－4－1　「対生活場面態度」の前後比較

前期＼後期	快	安心	積極	交わり	表情豊	不快	不安	消積	狐立	無表情	
快	1	1	1	1	5						9
安心		2		2							4
積極	2	1	3		2			1	1		10
交わり	1	2	1	4			2		1		11
表情豊	1	1	4	2							8
不快	1										1
不安			1		1						2
消極			1			1		1			3
狐立	2		3	1	2	1	1	1	3		14
無表情	1			1		1					3
	9	7	14	11	10	3	3	3	5		65

表2－4－2 「対母親態度」の前後比較

前期＼後期	快	安心	積極	交わり	表情豊	不快	不安	消極	狐立	無表情	
快	1	2			1						4
安心	1	27		3	2						33
積極		4		1	1				1		7
交わり		3	2	2							7
表情豊		6	2	2	3						13
不快											
不安											
消極					1						1
狐立											
無表情											
	2	42	4	8	8				1		65

C_1の下位テストにおいては，殆んどのものが平均3.0前後を示していて，前期と後期の差はわずかである。T検定により有意差を見い出したものは1つもない。C_2の下位テストにおいては，「対プレイ態度」も「対TH態度」も，前期後期共に好ましいとする評定をされた者が多い（「対プレイ態度」44人，「対TH態度」46人）。前期後期共に好ましくないとする評定をされた者は，両者4人ずつと少ない。「対プレイ態度」においては，前期に好ましいとする評定をされ，後期に好ましくないとする評定をされた者は10人であり，その逆の変化の者も10人である。「対TH態度」においては，前期に好ましいという評定をされ，後期に好ましくないという評定をされた者は2人であるのに対し，その逆の変化の者は15人と多い。「対プレイ態度」も「対TH態度」も，好ましい―好ましくないという次元で前後の変化が認められなかった者が多いが，とくに「対TH態度」の方では，好ましい方向に変化した者がいく分多くなっている。C_3の下位テストにおいては，平均が3.0から4.0位にあり，前期より後期の方が値が大きく，好ましい状態への変化が目立っているが，その差はわずかであり，T検定により有意差を見い出したものは1つもない。C_4の下位テストにおいては，「対生活場面態度」も「対母親態度」も，前期後期共に好ましいとする評定をされた者が多い（「対生活場面態度」37人，「対母親態度」63人）。とくに「対母親態度」では，殆んどの子どもが母親に対して，「安心」を中心とした好ましい態度を取り続けていると言える。前期後期共に好ましくないという評定をされた者は「対生活場面態度」では9人いるが「対母親態度」では1人もいない。「対生活場面態度」では，前期に好ましいとする評定をされ，後期に好ましくないとする評定をされた者は5人であり，その逆の変化を示した者は14人いる。「対母親態度」では，前期に好ましいとする評定をされ，後期に好ましくないとする評定をされた者は1人で，その逆の変化を示した者も1人である。C_2と同様，ここでも，好ましい―好ましくないという次元で前後の変化が認められなかった者が多いが，その傾向はとくに「対母親態度」の方で顕著であった。「対生活場面態度」の方では，前期から後期に好ましい方向へ変化した者がかなりいたと言える。

(C)親の変化：P_3とP_7のそれぞれの下位テスト評定値の前期―後期の差について，P_3は表3－1に平均と標準偏差を示し，P_7は表3－2に選択されたカテゴリーのパターンを示す。

表3－1 P_3の前後差（平均／標準偏差）

下位テスト	前期	後期
「子どもへの感じ方の悩み」	2.631 (0.734)	3.097 (0.770)
「子どもへのネガティブな感情」	2.486 (0.986)	2.602 (0.964)
「子ども自身の状態についての悩み」	4.169 (0.682)	4.147 (0.679)
「幼稚園・保育所・学校に関する悩みとニード」	4.123 (0.936)	4.076 (1.062)
「子どもへのポジティブな感情・態度」	2.130 (0.733)	2.142 (0.735)

表3－2－1 「今の子どもに対する気持」の前後比較

前期＼後期	安心	希望	受容	自信	落着	努力	不安	諦め	不信	迷い	焦り	混乱	
安心		1	1										2
希望		3	1	1	1	3	1					1	11
受容	1	2	4			1	1				1		10
自信	1												1
落着	1	1	1		3					1			7
努力		1	3		1	3				2			10
不安		1			1	1	4	1				1	9
諦め													
不信									1				1
迷い		1											1
焦り			1							1	1		3
混乱							1						1
	3	10	11	1	6	8	7	3		4	1	2	56

表３－２－２　「日頃の子どもに対する気持」の前後比較

前期＼後期	安心	希望	受容	自信	落着	努力	不安	諦め	不信	迷い	焦り	混乱	
安心		3					1						4
希望		5	2	1	1	3	2					1	15
受容	2	1	8	1		2				1	1		16
自信	1				1								2
落着	1		1			1	1			1			5
努力			3		1	3				2			9
不安		1					2						3
諦め													
不信													
迷い													
焦り													
混乱													
	4	10	14	2	3	9	6			4	1	1	54

表３－２－３　「子どもの母親に対する気持」の前後比較

前期＼後期	快	安心	積極	交わり	表情豊	不快	不安	消極	狐立	無表情	
快		1	3	1	1	2					8
安心		1	19	1	5	2	1		1	1	31
積極			1			1					2
交わり		3	3	1	5						12
表情豊			2	1		2					5
不快					1						1
不安						6					6
消極			1							1	2
狐立				1							1
無表情			1								1
		5	30	5	12	13	1		1	2	69

P_3 の下位テストの前期と後期の差はわずかであり，T検定により有意差を見い出したものは１つもない。平均するならば，親のニード等は大きな変化を示していないのである。P_7 の下位テスト「今の子どもに対する気持」においては，前期に好ましくないう評定をし，後期にも好ましい評定をした者が多く，34人である。前期も後期も好ましくないという評定をした者は10人いる。前期に好ましいという評定をし，後期に好ましくないという評定をした者は７人で，その逆の変化を示した者は５人である。変化の見られなかった親が比較的多いと言えよう。「日頃の子どもに対する気持」においては，前期に好ましいとする評定をし，後期にも好ましいとする評定をした者が多く，41人である。前期も後期も好ましくないという評定をした者は２人である。前期に好ましいという評定をし，後期に好ましくないという評定をした者は10人いるが，その逆の変化を示した者は１人だけである。ここでは，変化なしであった親が多いが，好ましくないという方向に変化した親も少なくないと言える。「子どもの母親に対する気持」においても，前期に好ましいとする評定をし，後期にも好ましいとする評定をした者は多く，55人である。前期も後期も好ましくないとする評定をした者は１人だけである。前期に好ましいとする評定をし，後期に好ましくないとする評定をした者は３人，その逆の変化を示した者は10人である。「日頃の子どもに対する気持」では好ましくないという方向に変化した者が少なくなかったが，ここでは好ましいとする方向に変化をした者が少なくないと言える。

(E)変化の総括：以上，C_1 から C_4，P_3 と P_7 の前後差について言えることは，まず，前後の変化があまり見られなかったことがある。恐らく，個々の事例を詳しく探っていけば，多様な前後差が発見されるであろうが，全体の平均として眺めるとき，前後差は殆んどないのである。ここにテスト実施期間の短かさの問題を提出できるが，既に得られている結果から明らかに言えることは，C_2，C_4，P_7 の各図式投影の評定に見られるピーク現象である。これらの各下位テストの多くでは，既に前期において，好ましいとする評定が多いのである。相談室スタッフの働きかけが負の効果をもつのであれば，好ましくない方向への変化も起きようが，スタッフの働きかけが正の効果をもつ場合には，ピークに達していることから，さらにその先への好ましい変化は，実際に生起していたとしても，テストの結果としては現れにくいのである。

４－３　相談（プレイ）場面と生活場面の対応

４－３および４－４においては，子どもの行動や親のニード等の変化の間の対応をとり上げていく。それぞれの下位テストの評定値は，ポジティブな変化をしているか，ネガティブな変化をしているかの２つのカテゴリーに分けることにした。ポジティブな変化とは，各下位テストを構成している項目の評定値（の平均）が，前期より後期の方で好ましい方向に変化していることを言う。ネガティブな変化とは，各下位テストを構成している項目の評定値（の平均）が，前期と後期との間で差異が認められないもの，および前期より後期の方で好ましくない方向に変化しているものの両者を含める。ネガティブ

な変化の中には，変化が見られなかった場合が含まれていることに注意を要する。また，図式投影法（C_2，C_4，P_7）については，2種の変化算出法を用いる。1つは第1カードのみで変化を算出するもので，第1カードのカテゴリーが好ましいものに＋1，好ましくないものに－1の得点を与え，前後の変化を取り出す方法である。もう1つは，第1カードのカテゴリーが好ましい場合＋2，好ましくない場合－2とし，2枚の第2カードのそれぞれにつき，好ましい場合＋1，好ましくない場合－1とし，3つの得点の合計から前後の変化をを取り出す方法である。

まず，子どものプレイ行動の変化と子どもの生活場面行動の変化の対応を検討する。

C_1，C_2とC_3，C_4の下位テストの関連を分析した結果，有意差（カイ自乗検定による）が見られたものを表4に示す。有意差があったのはC_3の「一般的関心」とC_1の「他のメンバーとの関わり」，「言語」との組合せの2つである。

表4　子どもの変化の対応

C_3「一般的関心」

		ネガティブな変化	ポジティブな変化
C_1「他のメンバーとの関わり」	ネガティブな変化	15	6
	ポジティブな変化	18	30

$x^2=6.739$　$P<0.01$

C_3「一般的関心」

		ネガティブな変化	ポジティブな変化
C_1「言語」	ネガティブな変化	20	13
	ポジティブな変化	13	23

$x^2=4.140$　$P<0.05$

「他のメンバーとの関わり」と「一般的関心」においては，前者でネガティブな変化をした者には後者で同様にネガティブな変化をした者が多く，前者でポジティブな変化をした者には後者では同様にポジティブな変化をした者が多くなっている。逆に，「他のメンバーとの関わり」でネガティブな変化をしたのに「一般的関心」ではポジティブな変化をした者は少なくなっているが，「他のメンバーとの関わり」でポジティブな変化をし，「一般的関心」でネガティブな変化をした者は18人と比較的多い。相談室のプレイ場面で，他のメンバーとの関わりがもてるようになると，日常の生活場面における子どもの一般的関心も増していることになるのである。ただし，プレイ場面で他のメンバーとの関わりがもてるようになっても，生活場面で一般的関心が増さない子どもが少ないわけではないのである。

「言語」と「一般的関心」においては，前者でネガティブな変化をした者には後者で同様にネガティブな変化をした者が多く，前者でポジティブな変化をした者には後者で同様にポジティブな変化をした者が多くなっている。これらと逆の関係になっている者はあまり多くないと言える。相談室のプレイ場面で，言語の発達が進んだ者は，日常の生活場面において一般的な関心も増しており，言語の発達が進んでいない子どもでは，一般的な関心も増していないのである。

検定を行なった下位テストの組合せが63個（C_1が5，C_2は第1カードのみで変化を算出したものと第2カードを含めて変化を算出したものの合計4×C_3が3，C_4はC_2と同様第1カードのみで変化を算出したものと第2カードを含めて変化を算出したものの合計4）あるうち，2組についてのみ有意差が認められたのである。これら2組は共に質問紙法によるテスト（C_1とC_3）について見られたものであり，図式投影法（C_2とC_4）を含む組合せで有意差を見い出すことはできなかったのである。有意差を見い出した2組におけるC_1の「他のメンバーとの関わり」と「言語」は，その1の基礎的分析によって，C_1の中心的な性質をあらわす下位テストに含まれることがわかっており，C_3の下位テストはかなり等質性が高いことから，C_1とC_3のそれぞれを代表する下位テスト間で，子どものプレイ場面の行動の変化と子どもの日常場面の行動の変化との対応が見られたと考えることができる。

4－4　親子の変化の対応

子どもの日常の生活場面およびプレイ場面の行動と，親のニード等の変化の間に意味のある関連があるか否かを検討するために，C_1からC_4の下位テストとP_3，P_7の下位テストの全ての組合せについてカイ自乗検定を行なった。その3で説明した通り，変化は，ポジティブな変化であるのか，ネガティブな変化であるのかの2カテゴリーに分けた。

カイ自乗検定を行なった下位テストの組合せは全部で176個（C_1が5，C_2が2種の算出法で4，C_3が3，C_4が2種の算出法で4×P_3が5，P_7が2種の算出法で6）あるうち，有意差が見られた組合せは3個あり，それらを表5に示す。表5のクロス表のセル内の数値が5以下になっている場合には，Yate の補正式（肥田野他，1973）を用いてカイ自乗値を算出した。

C_2の下位テスト「対プレイ態度」は，P_3の下位テ

表5　親子の変化の対応

P_3「子どもへのネガティブな感情」

		ネガティブな変化	ポジティブな変化
C_2「対プレイ態度」	ネガティブな変化	36	22
	ポジティブな変化	2	8

$x^2 = 4.535$
$P < 0.05$

P_7「子どもの母親に対する気持」

		ネガティブな変化	ポジティブな変化
C_2「対TH態度」	ネガティブな変化	50	2
	ポジティブな変化	11	4

$x^2 = 4.900$
$P < 0.05$

P_7「日頃の子どもに対する気持」
（第1カード＋第2カード）

		ネガティブな変化	ポジティブな変化
C_3「言うことを聞く」	ネガティブな変化	26	8
	ポジティブな変化	18	17

$x^2 = 4.681$
$P < 0.05$

スト「子どもへのネガティブな感情」と有意な関連が見られた。前者がネガティブな変化をした者には後者で同様にネガティブな変化をした者が多く，前者でポジティブな変化をした者には後者で同様にポジティブな変化をした者が多くなっている。逆に，「対プレイ態度」でポジティブな変化をしたのに「子どもへのネガティブな感情」でネガティブな変化をした者は少なくなっている。しかし，「対プレイ態度」においてネガティブな変化をし，「子どもへのネガティブな感情」においてポジティブな変化をした者は22人であり比較的多くなっている。対プレイ態度が好ましい方向に変化した場合，子どもに対する否定的な感情は弱くなり，子どもの対プレイ態度が好ましくない方向に変化した場合，親の子どもに対する否定的な感情は促進されるのであるが，子どもの対プレイ態度が好ましくない方向に変化したのに子どもに対する親の否定的感情が弱まることも少なくないと言うことができる。

もう1つのC_2の下位テスト「対TH態度」とP_7の下位テスト「子どもの母親に対する気持」との間に有意な関連が見られた。前者がネガティブな変化をした者には後者で同様にネガティブな変化をした者が多く，前者がポジティブな変化をした者には後者でもポジティブな変化をした者が多少多くなっている。「対TH態度」でネガティブな変化をしていたのに「子どもの母親に対する気持」でポジティブな変化をした者は少ないが，「対TH態度」でポジティブな変化をし，「子どもの母親に対する気持」でネガティブな変化をした者は多少多くなっている。治療者に対する態度が好ましくない方向に変化した子どもの母親に対する気持は好ましくない方向に変化するのだと言うことができる。

C_3の下位テスト「言うことを聞く」とP_7の下位テスト「日頃の子どもに対する気持」（第1カードのみから変化を算出した場合には有意差が認められなかった）との間に有意な関連が見られた。前者でネガティブな変化をした者には後者でネガティブな変化をした者が多く，前者でポジティブな変化をした者には後者でポジティブな変化をした者が多くなっている。「言うことを聞く」でネガティブな変化をしたが，「日頃の子どもに対する気持」でポジティブな変化をした者は少ないが，「言うことを聞く」でポジティブな変化をしたが，「日頃の子どもに対する気持」でネガティブな変化をした者は少なくない。プレイ場面で他者の言うことを子どもがよく聞くようになると，生活場面で親が日頃の子どもに対して向ける気持は好ましいものに変化しているのである。この逆の傾向も認められるが，子どもが他者の言うことをよく聞くようになっても，親の日頃の子どもに対する気持は好ましくならない場合は比較的多い。

子どもの行動の変化と親のニード等の変化の関連について，まず注目されるのは，176の組合せのうち3つの組合せしか有意差を見い出せなかったことである。少なくとも図式投影法（C_2，C_4，P_7）については，その3で述べたのと同様，ピーク現象が現れているため，変化が見い出しにくかったのだと考えることができよう。既に前期において，子どもの行動も親のニード等も好ましい状態に到達しており，さらに好ましい状態が後期に成立していたとしても，用いたテストにおいてはその変化は検出することができなかったと考えることができるのである。

有意差の見い出された3つの組合せにおいて，気づかれることは，子どものネガティブな変化は親のネガティブな変化に対応し，子どものポジティブな変化は親のポジティブな変化に対応していることがほぼ認められたことである。しかし，残りの173の組合せが，同様の傾向をもちつつも有意水準に達しなかったと主張できるわけではない。むしろこれらの有意水準に到達しなかった組合せのうちには，子どものネガティブな変化と親のポジ

ティブな変化の対応，子どものポジティブな変化と親のネガティブな変化の対応を示唆するものが少なくなかったのである。有意差の得られた3つの組合せの結果のみから，子どもの変化と親の変化に一定方向の関係があったと結論することはさし控えなければならないであろう。

5　結論と今後の課題

基礎的分析について，下位テスト間で，極めて高い相関は見られなかったが，多くの場合，有意な相関が得られた。最も独立していたものはP_7における「子どもの母親に対する気持」であった。この各下位テストの等質性がとくに高くはないという結果から，下位テストを分析の単位指標として用いることが妥当であることがわかった。

C_1 からC_4 までの下位テスト評定値の前後差は顕著なものではなかった。C_1 とC_3 では前後の評定値の差はなかった。C_2 とC_4 では，どの下位テストにおいても，前後共に好ましいとする評定がなされたものが多く，前後共に好ましくないとする評定，前後差を示す評定は多くはなかった。P_3 と P_7の下位テスト評定値の前後差も顕著なものではなかった。P_3では，前後の評定値の差はなかった。P_7では，どの下位テストにおいても，前後共に好ましいとする評定がなされたものが多く，前後共に好ましくないとする評定，前後差を示す評定は多くはなかった。

本論の最大の目的である子どものプレイ行動（C_1, C_2）の変化と子どもの生活場面行動（C_3, C_4）の変化との対応に関しては，C_3の「一般的関心」とC_1の「他のメンバーとの関わり」，「言語」との間に有意な対応が見られた。C_1とC_3 のそれぞれを代表すると言える下位テスト間で，子どものプレイ場面の行動の変化と子どもの日常場面の行動の変化に関連がみられた。しかし図式投影法（C_2, C_4）についてはそのような関連がみられなかった。なお，全体として，有意な関連があった組合せは少なかったと言える。

子どもの行動（C_1から C_4）の変化と親のニード等（P_3, P_7）の変化との対応に関しては，C_2の「対プレイ態度」とP_3の「子どもへのネガティブな感情」，C_2の「対TH態度」とP_7の「子どもの母親に対する気持」，C_3の「言うことを聞く」とP_7の「日頃の子どもに対する気持」の3つの組合せについて有意な関連があった。しかし，全体として，有意な関連のあった組合せは少なかったと言える。

子どものプレイ場面における変化と子どもの日常の生活場面における変化が正の方向で関連し，子どもの変化と親の変化が正の方向で関連するという仮定を積極的に否定する結果は生まれなかったが，それらの関連を示す証拠も多くはなかったと結論づけることができよう。

以上のように統計的総括としては，常識的に考えられる仮説が部分的に裏づけられてはいるが，十分とはいえない。むしろ十分に予期どおりにならないという事実の中から，当初の仮説が検討されていくべきであろう。ただし研究法上にもいくつかの問題はある。前期と後期のテスト実施期間が短かかったことなどである。障害児の行動の変化は短期間に顕著に起るものでなく，今後の研究においてはテスト実施期間を長くとる必要があるだろう。また，実際に起きている変化を，テスト方法やデータの集計方法が見逃してしまっているのではないかという問題をあげることができる。とくに図式投影法において見られたことは，前期の時点で既に評定が好ましい方向に傾いてしまい，それ以上の好ましい方向への変化は数値として現れにくくなっているというピーク現象である。ここから，テストが好ましさの次元のもっと微細な変化を反映できるものに修正される可能性を考えることができる。これは，またむしろデータの集計方法の拙さに還元できるかもしれない。たとえば，図式投影法において，選ばれたカテゴリーの変化は多彩であった。それを単純に好ましさの次元に集約してしまったため，微妙な変化を誤差にしてしまった恐れは多分にある。図式投影法の反応の豊かさを生かした集計方法を作り出せば，そこに実際に起きている変化により近似した変化を見い出す可能性は高いと考えられる。

以上のような問題点を今後つめていくためにも，本研究に独自の図式的投影法を用いた事例研究に戻り，治療的変化や意識変化のニュアンスをとらえていくことが継続吟味されなければならない。

なお，本研究の資料収集について相田玲子，片寄玲子をはじめ文教大相談室の協力を得たことを付記しておきたい。

文　献

1. 植村規代他（1980）民間相談機関における臨床技術について ―― 就園前障害幼児の指導技術を通して ―― その4　日本総合愛育研究所紀要　第16集33－41
2. 東京臨床心理研究会（1981）図式投影法とイメージ認知 ―― 体験と意識の総合研究方法論として ――
3. 肥田野直也（1973）心理教育統計学　培風館
4. 文教大学人間科学研究会（1981）体験と意識に関する総合研究　第3集
5. 水島恵一・宮崎徳子他（1981）民間相談機関におけ

る臨床技術について ── 就園前障害幼児の指導技術を通して ── その5　日本総合愛育研究所紀要　第17集　315 － 330
6. 宮崎徳子他（1979）民間相談機関における臨床技術について ── 就園前障害幼児の指導技術を通して ── その3　日本総合愛育研究所紀要　第15集　247－257
7. 村瀬和子他（1978）民間相談機間における臨床技術について ── 就園前障害幼児の指導技術を通して ── その2　日本総合愛育研究所紀要　第14集　247－25

付　表

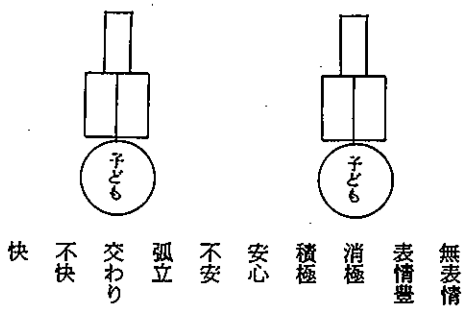
テスト	下位テスト	項　目
C_1	「母子分離と緊張の度合」	親と分離でき遊べる 緊張の度合（不安そうに身をこわばらせるなど）
	「遊び（の活発さ）」	いろいろな遊具に関心を示す 発展的に遊ぶ THの働きかけに応じる
	「THとの関わり」	THに積極的に働きかける 身体接触をしてほしがる
	「他のメンバーとの関わり」	他のメンバーへ関心を示す メンバーの働きかけに応じる メンバーへ積極的に働きかける
	「言語」	言語表出がある 言語理解がある 指示に従う 自分を抑えることができる
C_2	「一般的関心」	いろいろなものに関心を示す 自分でいろいろ工夫して遊ぶ 近所の子どもが家に来た時友だちの働きかけに応じる 近所の子どもが家に来た時に友だちに働きかける 友だちの家や公園に行った時友だちの働きかけに応じる 親に抱かれたがる（親のひざにすわりたがる）
	「大人との関係」	親が相手をしてあげると喜ぶ 親に相手をして欲しがる 家族以外の大人が来た時，相手をしてもらうと喜ぶ 家族以外の大人が家に来た時，その人に相手をしてほしがる
	「言うことを聞く」	ひとりでまたは兄弟と留守番ができる 感情の動揺が激しい 親の言うことがわかる 親の言うことに素直に従う 我慢することができる

	「子どものポジティブな感情・態度」	子どもの変化・成長がみられるので嬉しい この子を育てるのは生きがいの一つであり，この子なしの生活は考えられない 私はこの子が好きである この子といるのは楽しい こういった子どもをもたなかったら，今ほど生きることの意味が感じられなかったと思う この子がいることによって，他の兄弟に良い影響を与えていると思う
P_3	「子どもへの感じ方の悩み」	この子の気持ちや，行動の意味が理解できないいら立ちを感じる 子どもに適切に接することができない自分へ嫌悪感を覚える 子どもの変化・成長をなかなか認められない焦りを感じる 自分の子どもへの接し方はこれでよいのか疑問に感じている この子の欠点ばかり目についたり気になったりする 近所の人の無理解・好奇の目に悩む 近所の子どもとうまく遊べないので悩む
	「子どもへのネガティブな感情」	この子さえいなければと思うことがある 自分の子どもでも憎らしいと思うことがある この子がいるのでわずらわしく感じることがある 子どもの状態・行動に対するいら立ち，腹立ち，怒り
	「子ども自身の状態についての悩み」	子どもの発達の遅れに対しての心配 子どもの将来の不安 子どもの発達の遅れの原因が知りたい 子どもの今後の発達の見通しが知りたい 子どもを順調に育てられなかったのは自分の育て方のせいかと悩む
	「幼稚園・保育所・学校に関する悩みとニード」	幼稚園・保育所・学校への入園・入学に対する不安 幼稚園・保育所・学校の選択について悩む 幼稚園・保育所・学校の情報が知りたい 幼稚園・保育所・学校への紹介などを相談所で援助して欲しい

テスト

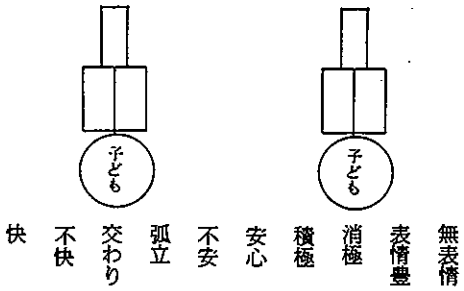
C_2

「対プレイ態度」　「対TH態度」



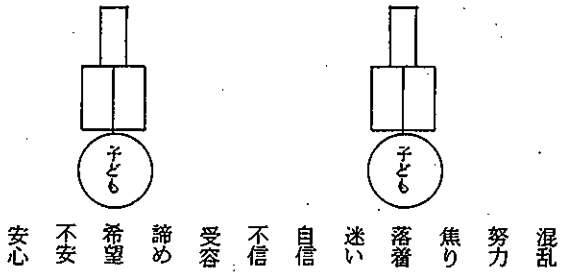
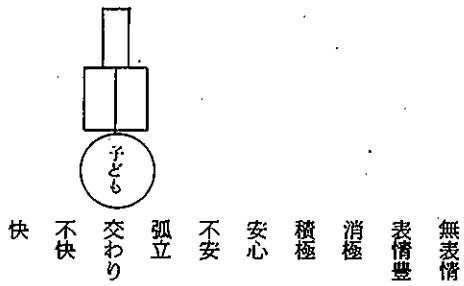
C_4

「対生活場面態度」　「対母親態度」



P_7

「今の子どもに対する気持」　「日頃の子どもに対する気持」



「子どもの母親に対する気持」